

平成28年度

別寒辺牛湿原における
イネ科植物相と移入植物の影響について



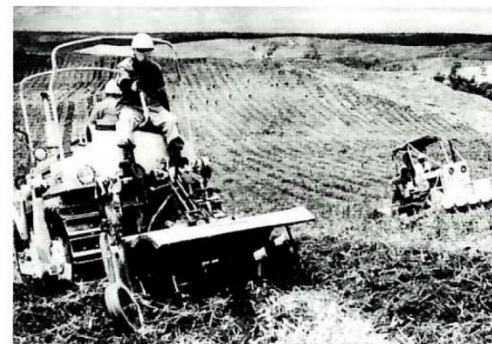
北海道大学総合博物館資料部研究員
佐藤広行

別寒辺牛湿原周辺の歴史

別寒辺牛湿原は1993年にラムサール条約に登録された国内有数の原生的な自然が残された湿原であるが、周辺の森林地帯の多くは開拓・造成され人の攪乱を受けた土地で、その後「パイロットフォレスト」と命名され森林が造成された。



湿地に丸太を並べただけの浮橋(昭和33年)



左:ローターベータ(耕耘機)と右:ロータリースラッシャー(刈払機)(昭和37年)



人力による植付け作業(昭和37年)



ツリープランターによる植付け作業(昭和38年)

目的

人間活動が行われた経緯から、自生している野生植物の現状についても、種数や個体数の減少について危惧されるため、イネ科を主として移入植物(帰化植物・外来植物)について調べた。

移入植物(帰化植物・外来植物)とは

本来の生育地ではない所から人為的に運ばれ、定着した植物。多くは環境適応能力が高く、繁殖力も高いため、在来植物を駆逐し、生態系を混乱させ、生物の多様性を低下させる要因となる。



オオハンゴンソウ



カモガヤ

結果

確認された19種の移入植物の内、ヒトフサニワゼキショウ、イタチハギ、セイヨウトゲアザミが新たに移入していることが分かった。

Table 1. 調査範囲で見つかった移入植物のリスト

科名	学名	和名	新規
アヤメ科	<i>Sisyrinchium mucronatum</i> Michx.	ヒトフサニワゼキショウ	●
イネ科	<i>Alopecurus pratensis</i> L.	オオスズメノテッポウ	
イネ科	<i>Dactylis glomerata</i> L.	カモガヤ	
イネ科	<i>Phalaris arundinacea</i> L.	クサヨシ	
イネ科	<i>Poa pratensis</i> L.	ナガハグサ	
イネ科	<i>Schedonorus pratensis</i> (Huds.) P.Beauv.	ヒロハノウシノケグサ	
マメ科	<i>Amorpha fruticosa</i> L.	イタチハギ	●
アヤメ科	<i>Trifolium pratense</i> L.	ムラサキツメクサ	
アヤメ科	<i>Trifolium repens</i> L.	シロツメクサ	
アブラナ科	<i>Barbarea vulgaris</i> R.Br.	ハルザキヤマガラシ	
タデ科	<i>Rumex acetosella</i> L.	ヒメスイバ	
ナデシコ科	<i>Stellaria graminea</i> L.	カラフトホソバハコベ	
キク科	<i>Achillea millefolium</i> L.	セイヨウノコギリソウ	
キク科	<i>Cirsium arvense</i> (L.) Scop.	セイヨウトゲアザミ	●
キク科	<i>Erigeron strigosus</i> Muhl. ex Willd.	ヘラバヒメジョオン	
キク科	<i>Leucanthemum vulgare</i> Lam.	フランスギク	
キク科	<i>Rudbeckia laciniata</i> L.	オオハンゴンソウ	
キク科	<i>Solidago gigantea</i> Aiton	オオアワダチソウ	
キク科	<i>Taraxacum officinale</i> Weber ex F.H.Wigg.	セイヨウタンポポ	

結果および考察

森林地帯での移入植物は森林への入り口付近が最も多く、イネ科植物の移入種は株状になって分布しており、駆除は不可能ではないが、キク科植物の移入種は、林内のいたる所で確認でき、また、種子を大量に拡散するため、根気よく除去作業する必要がある。また、カモガヤなどイネ科の移入植物は花粉症のアレルゲンとなる花粉を大量に飛散するため、市街地での拡大も抑制することが必要。

問題点

目的外であったが、森林地帯の植物相を調べると、206種確認でき、既存の調査報告からさらに31種追加された。調べれば調べるほど、新たな追加種や新種などの発見が期待できるため、植物分類学者や生態学者や環境調査を専門とする専門家集団による大規模な再調査が求められる。

問題点2

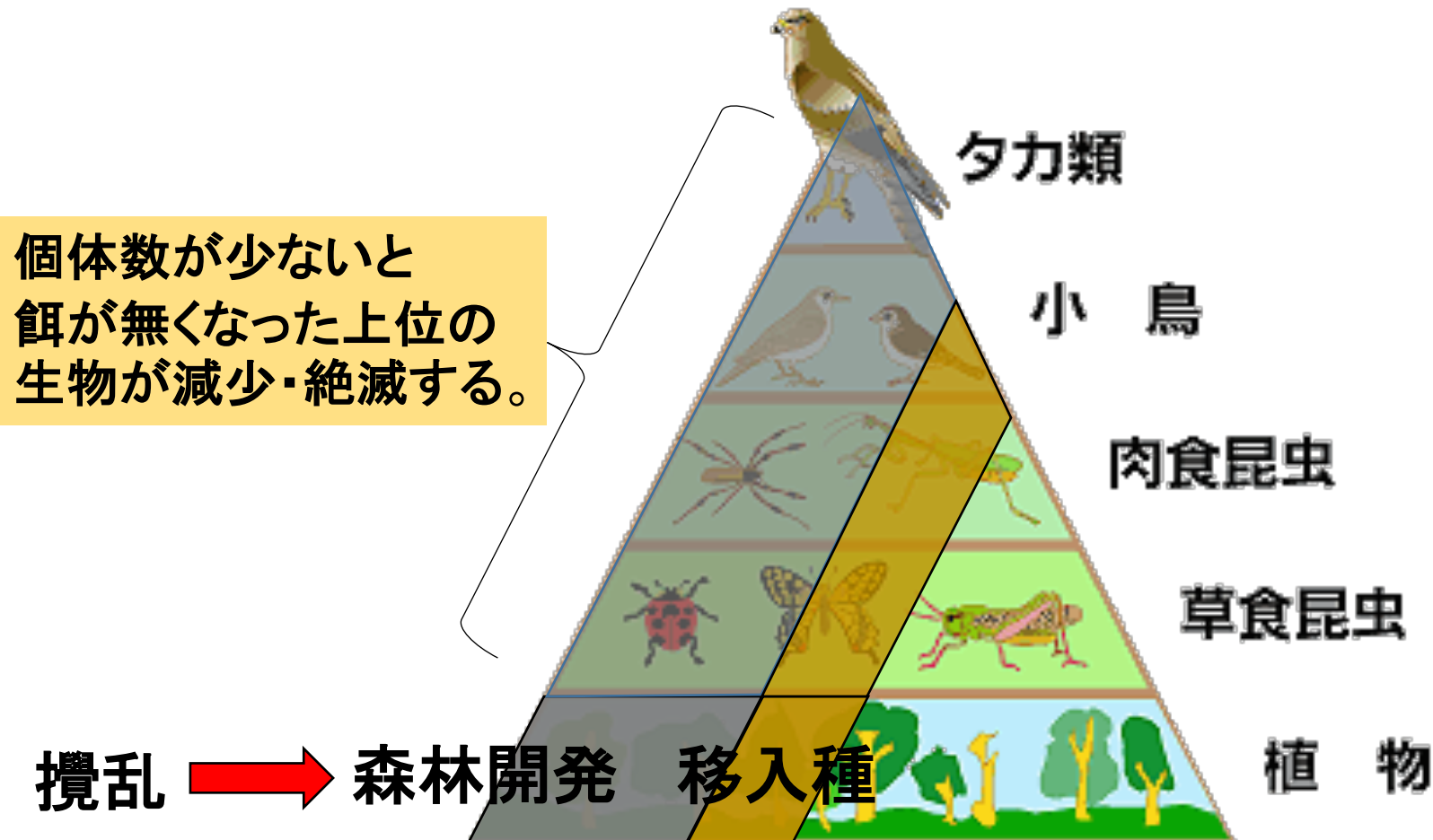
植物種数はあるが、**個体数が少ない**。森林内の林床は単純化しており、一般的に観察されやすい普通種の個体数が少ない。



ミヤコザサに覆われる林床

問題点2

植物の個体数が少ないと生態系ピラミッドが崩れ、生物の多様性が減少するため、個体数の回復を試みなければならない。



課題

個体数も多く、生物種数も多い森林の再生を目指し、豊かな自然環境を取り戻す活動が必要になる。



9株しか確認できなかったノビネチドリ

まとめ（期待したいこと）

どれだけの生物がいるのか高い精度の調査が求められる

→ 専門家による生物相の再調査

個体数が少なくなったか判断できない

→ 個体数の増減を継続調査しデータの収集

豊かな生物が暮らす森づくり

→ 単純化した林床植生を、多様な植物が生きる林床植生へ復原